

くるい咲き

野村胡堂

—

相変らず捕物の名人の銭形平次が、大縮尻おおしくじりをやって笹野新三郎に褒められた話。
その発端ほったんは世にも恐ろしい『晝屋殺し』でした。

「た、大変ッ」

麴町四丁目、晝屋弥助のところにいる職人の勝蔵が、裏口から調子ばずっ外れな声を出します。

「何だ、又調練場ちょうれんばから小蛇こへびでも這出はいだして来たのかい」

と、その頃は贅ぜいの一つにされた、猿屋さるやの房楊枝ふさようじを横くわえにして、弥助の息子の駒次郎が、縁側へ顔を出しました。

「それどころじゃねえ」

「町内中の騒ぎになるから、少し静かにしてくれ。麴町うわぼみへ巨蟒きゅうぼうなんか出っこはねえ」

「今度のは巨蟒きゅうぼうじゃねえ、丈吉の野郎が井戸で死んでいるんだ」

「何だと」

駒次郎は、跣足はだしで飛降りました。そこから木戸を押すと直ぐ釣瓶井戸す っるべで、その二間ばかり向うは、隣の屋敷と隔てた長い黒板塀くろばんべいになっております。

丈吉の死体は、井戸端にくみ上げた釣瓶に手を掛けて、そのまま崩折れたなりに冷たくなっていたのでした。

抱き起して見ると、右の眼へ深々と突っ立ったのは、商売物の磨き抜いた晝針たたまばり。

「あッ」

駒次郎も驚いて手を離しました。

「ね、兄哥、丈吉の野郎が、何だって晝針を眼に突っ立てたんでしょ」

「そんな事は解るものか。親父へそう言ってくれ」

「親方はまだ寝ていますぜ」

「そんな事に遠慮をする奴があるものか」

勝蔵が主人の弥助を起して来ると、井戸端の騒ぎは際限もなく大きくなって行きます。

変死の届出があると、町役人が立会の上、四谷の御用聞で朱房しゅぶさの源吉という顔の良
いのが、一応見に来ましたが、裏木戸やお勝手口の締りは嚴重な上、塀の上を越した
跡もないので、外から曲者が入った様子は絶対にないと言う見込みでした。

それに、丈吉はなかなかの道楽者で諸方に不義理の借金もあり、年中馬鹿馬鹿しい
女出入りで悩まされていたので、十人が十人、自害じがいを疑う者はありません。

「持ち合せた畳針で眼を突いて、井戸へ飛込むつもりだったんだね。ところがここま
で来ると力が脱けて井戸へ飛込む勢いもなくなった——」

朱房の源吉は独り言を言いながら、もっともらしくその辺を見廻したりしました。

「親分の前だが、こいつは自害じゃありませんぜ」

不意に横合から、変な口を利く奴があります。

「何だと？」

振り返るとそこに立っているのは、銭形の平次の子分で、お馴染なじみのガラッ八、長い
顔を一倍長くして、源吉の後ろから、肩へ首を載つけるように覗いているのでした。

「ね、朱房の親分、井戸へ飛込んで死ぬ気なら、何も痛い思いをして、眼なんか突か
なくたって宜いでしょう」

「何？」

「それに、商売柄、縄ほうちょうにも庖丁にも不自由があるわけはねえ」

八五郎は少し調子に乗りました。さすがに死体には手は着けません、遠方から唇くち
を尖らせ、平次仕込みの頭の良いところをチョツピリ聴かせます。

「手前は何だ」

「へエ——」

「どこから潜もぐって来やがった」

源吉の調子は圧倒的でした。

「神田の平次親分のところにいる八五郎で、へエ——」

「ガラッ八は名乗らなくたって解っているよ、その長い顎が物を言わア、看板いつわに偽り
のねえ面だ」

「へエ——」

「俺が訊くのは、どこから何の用事で来たか——てんだよ。ここへそんな顎を突っ込
むのは縄張り違えだろう」

「朱房の親分、決してそんな訳じゃありません。平川天神様へ朝詣りをして、三丁目へ通りかかると町内中の噂だ。知らん振りもなるまいと思うから、ちょっと顔を出したままで」

「面だけで沢山だ。口なんか出して貰いたくねえ」

「相済みませんが、親分、どう見たってこれは自害じゃありません。自分の手で、眼玉へ畳針を三寸も打ち込めるもんじゃありませんぜ」

ガラッ八も容易に引下がりにません。

「目玉へ畳針を当てて、井戸端へ頭を叩きつけたらどうだ」

「それなら井戸端へ血がつく筈じゃありませんか」

「血なんか幾らも出ちゃいないよ」

「もう一度調べ直して下さい。外から曲者が入ったんでなきやア、家の中の者でしょう。その男は金廻りも悪いが、女癖おんなぐせが悪かったって言いますから」

「さア、もう帰って貰おうか、ガラッ八親分なんざ、物を言うだけ恥かを搔くぜ、——昨夜はあの良い月だ。井戸端で立ち廻りをやるのを、家の者が知らずにいる筈もなし、第一、人間の眼は八五郎兄哥の前だが、どこかの岡っ引よりは、余すばしこ程敏捷いぜ。畳針を突っ立てられるまで、開けっ放しになっちゃいねえ、瞬またたきをするとか、顔を反けるとか、何とかするよ」

「——」

「畳針は真っ直ぐに突っ立っているし、頬にも脛にも傷はねえ」

源吉はしたり顔でした。死体になった丈吉は、衣紋えもんの崩れもなく、瞳へ真っ直ぐに立った畳針を見ると、争いがあったとは思ひも寄らなかつたのです。

「——」

ガラッ八はかたずごくりと固唾を呑みました。丈吉が気でも違ってない限り、丈夫な縄も、鋭利な庖丁えいりも捨てて、一番無気味な、一番不確実な、畳針で死ぬ気になった心持が呑込めなかつたのです。

「神田の八五郎兄哥は、この家の中に下手人がいる見込みだとよ、皆んな顔を並べて、人相でも見せてやんな、——自棄やけに良い男が揃っているじゃないか。女出入りなら駒次郎兄哥などが早速やられる口だぜ。金が欲しきやア、弥助親方だ、——何だつて又選りに選ぶおとこって、醜男で空っ尻で、取柄も意気地もねえ丈吉などの眼玉を覗ったん

だ」

朱房の源吉は、井戸端に集まった多勢の顔を見渡ししながら、いい心持そうにこんな事を言いました。

主人の弥助は五十を越した年配、その俵^{せがれ}、駒次郎は取って二十三、これは山ノ手の娘に大騒ぎされている男前、職人の勝蔵も、二十五六の苦み走った男、源吉が言うのは、満更出鱈目^{でたらめ}ではなかったのです。

「やい、八兄哥、帰ったら平次へそう言いな、近頃少し評判がいいようだが、あんまり出しゃ張るとろくな事になるめえ——とな」

シヨンボリ帰って行くガラッ八の後姿へ、源吉は思う存分の悪罵^{あくば}を浴びせました。平次には余っ程怨みがある様子です。

二

「親分、こういうわけだ、あゝしは何と言われたって構わねえが、親分の事まであんなに言われちゃ我慢がならねえ。お願いだから四丁目まで行ってやっておくんなさい。源吉の鼻をあかさなきゃア、この稼業^よは今日限り止しだ。足を洗って紙屑拾いでも何でもやりますよ」

ガラッ八の折入った様子は、世にも不思議な痛々しさでした。浴衣^{ゆかた}の尻を端折って、朝顔の鉢の世話を焼いていた平次も、思わず真剣な顔を挙げます。

「大層腹を立てたんだな八、手前にも似わない」

「腹も立てますよ、親分」

「まア宜い、俺にまで喰ってかかられちゃ叶わない、ちょっと行って見るだけでも、見てやろうか」

と平次。

「親分、本当に行って下さるか」

「八の顔だって汚しっ放しにはなるめえ、それに、話の様子じゃ、俺が考えても自害じゃねえ」

「有難てえ、それでこそ銭形の親分だ」

「馬鹿野郎、おだてに乗って出かけるわけじゃねえぞ」

「ヘッ、ヘッ」

ガラッ八は自分の額をピシャピシャ叩いておりました。この心服しきっている親分から『馬鹿野郎』と叱られる^{たび}度に、嬉しくて嬉しくてたまらない様子です。

四丁目の畳屋へ行ったのは、巳刻少し過ぎ、朱房の源吉は引揚げましたが、幸い丈吉の死体は、^{むしろ}筵を掛けたまま、まだそのままにしてありました。

「フーム」

筵を^と除って一目、平次は^{うな}呻りました。忙しく四方の様子を見廻して、もう一度ガラッ八の顔に^{かえ}還った瞳には、『——よく疑った——』と言うような色がチラリと見えるのでした。

「ね、親分、誰かに^{ぼら}殺されたに違いないでしょう」

少しばかりガラッ八の鼻は^{うご}蠢めきます。

「そんな事が解るものか——これだけ力任せに畳針を刺すうち、凝っとしているのは可笑しいな」

「眠っているところをやられたら？」

ガラッ八、今度は少し不安になりました。

「井戸端で眼を開いて寝ている奴はない」

「^{よっぱら}酔払っていたらどうです」

とガラッ八。

「丈吉は生れつきの下戸で、^{たるがき}樽柿を食っても赤くなる野郎でしたよ」

主人の弥助は後ろから口を出しました。折角朱房の源吉が自害として運んでいるのを、変な場違い野郎が飛出して、『殺し』にしようという態度が、^{しゃく}癩にさわってたまらなかったのです。

「親分、向うの二階から手裏剣を飛ばしたらどんなものでしょう」

ガラッ八はそっと囁きます。畳屋の裏は黒板塀を隔てて、しもたやが二軒、一軒は平屋の女世帯、一軒は裕福な浪人者の住居、こちらの方には、小さい二階があったのです。

「少し遠いな、——それに、畳針は手裏剣には少し軽いからあの二階から打ったんでは、頬に傷をつける位が精々だ。眼玉を狙って三寸も打ち込むわけには行くまい」

「——」

ガラッ八は黙ってしまいました。折角神田から引張り出してきた親分の平次も、これでは源吉とたいした変りはありません。弥助も、その伴の駒次郎も、職人の勝蔵も口には出ませんが——好い気味だ——と言った顔で、ガラッ八の照れ臭い様子を眺めております。

「お隣りはどんな人が住んでいなさるんで？」

平次は改めて弥助に訊きました。

「右の方は下町の物持のお嬢さんが一人、何でも妾腹しょうふくで御本宅がやかましいとかで、下女のんきが二人ついて暢気に暮していますよ、お名前はお町さん——」

「左の方は」

「御浪人ですが、これは大藩の御留守居をなすった方で、お金がうんとあります。町内の質屋もとでに資本を廻して、お子様と二人暮らし、——お子様と言ったところで、もう二十歳は近いお嬢さんで、これはお綺麗な方です」

弥助は揉手をしながら、自分のことのようにニコニコしております。余程浪人と懇意こんいにしている様子です。

「お年は？」

「厄やく少し過ぎでしょうか、御名前は大里玄十郎様、立派な方で御座います」

三

平次は一応現場を調べた上、町内の質屋へ行って見ました。

大里玄十郎の暮らし向きの事を訊くと畳屋の主人が言ったのは、まるっ切り大嘘おおうそ、質屋へ資本もとでを廻しているどころか、その日の物には困らないまでも、暮らしが贅沢なのと、娘のお才が派手好みなので、内々、腰の物までも曲げることがあると言う話——「近頃畳屋とすっかり昵懇じっこんになったようですから、いずれあの娘を、駒次郎へ押しつけるつもりでしょう。この節の武家は、そんな事を何んとも思っちゃおりませんよ。——それにあの畳屋は一丁目から御見附まで、表通りには、及ぶ者もない物持ですからね」

そっと、こんな立ち入ったことまで教えてくれました。

平次はその足で直ぐ大里玄十郎の格子の外に立ちました。

「何？ 錢形の平次が参った、丁度宜い塩梅だ、こっちにも言いたいことがある」
一刀を掲げて、上り框にヌツと突っ立ったのは、青髯の跡凄まじい中年の浪人で
す。

「恐れ入りますが、一寸お嬢様に御目に掛りとう御座いますが」

慇懃な平次を尻目に見て、

「馬鹿奴ッ、手先御用聞に口をきくような娘は持たぬぞ——この家の二階から手裏剣
を打って丈吉を殺した——などと言った奴があるそうだが、飛んでもない野郎だ。十
間以上離れたところから畳針を飛ばして、人の命をとるほどの腕があれば、浪人など
はしていないぞ」

「恐れ入ります」

「恐れ入ったら帰れ帰れ、畳屋の職人を殺すほど怨も理由もある拙者ではない。この
上用事があるなら、せめて町方の役人を伴って来い、馬鹿馬鹿しい」

いやもう滅茶滅茶です。

「飛んだお邪魔をいたしました、御免」

平次とガラッ八は、キリキリ舞いをして引き下がりました。何心なく振り返ると、
袖垣の上から一と目に見える縁側に、二十歳ばかりの武家風とも町家風ともつかぬ
娘が立って、二人の後ろ姿を見送っているのと、顔を見合せてしまいました。

背の高い、少し骨張った娘ですが、何となく艶めかしい十人並に優れた美しさで
す。

「親分、済まねえ、手裏剣は間違いだったネ」

追いつがるようにガラッ八。

「最初っから俺はそんな事を考えちゃいねえよ」

「じゃ矢張り自分の眼へ針を刺して井戸端へ頭をぶっつけたんで」

とガラッ八。

「そんな事が出来る芸当かどうか、やってみな」

「へッ」

そんな事を言いながら、二人はもう一軒の隣、お町という娘の住んでいる家の格子
の外に立っておりました。

「お町さんはいなさるか。神田の平次だが、ちょいと逢って下さい」

くるい咲き

「へエ——」

年頃の下女は奥へ飛んで行きました。隣りに騒ぎのあったことは知っている筈ですから、神田の平次という言葉がピンと来たのでしょう。

暫くすると、

「あの、済みませんが、お嬢さんは寝^{やす}んでおります、え、お風邪^{かぜ}で御座います。どんな御用でしょう？」

先刻の下女が物に怯^{おび}えたように、畳の上へ手を突いているのです。

「風邪？ それはいけないな、夏の風邪は抜け難いから、用心なさるがいい、何時から寝なすったんだ」

平次の調子は至って平坦でした。

「昨夜宵のうちからお加減が悪そうでしたが、今朝はもう起きていらっしゃいません」

「そうかい」

「あの、御用は？」

「なアに、たいした事ではないが、——隣りの畳屋の職人が死んだのをお聞きなすつたろう」

「へエ」

「あれは、人に殺されたんだと思うんだ。心当りはあるまいね」

「いえ、何にも」

「あの丈吉とか言う男は、時々ここへ来ることがあったかい」

「一度もいらっしゃいません。私などはお顔もろくに知らない位で——」

「駒次郎兄哥は時々来るだろうね」

「へエ——」

そう言っ下女はハッと袖口で口を覆^{おお}いましたが続けて、

「でも、でもあの、近頃はさっぱりいらっしゃいません」

「そうだろう、大里様のお才さんと近いうちに祝言するそうだから」

「——」

妙に探り合いのような、擦^{くすく}った空気です。

「お嬢さんにはお目に掛るまでもないんだが、その代りあの塀のあたりを見せて貰

「いたいよ、丈吉殺しの曲者が、あの辺から塀を越して行ったかも知れないんでネ」

「――」

下女が返事をする前に、ガラッ八を目で^{さしま}靡ねいた平次は、畳屋との境になっている黒板塀の方へ近づきました。

南を塞がれているので、草花の育ちそうもない塀の下は、ジメジメした^{こけ}苔の上に、女下駄の跡だけが幾つかほのかに読めます。

「親分、男なんざ入った様子はありませんね。それにこの塀と来た日にゃ、まさか人間は潜られないが、バツタ、カマキリ、蝶々、^{とんぼ}蜻蛉は潜り放題だ」

全くその通りでした。畳屋の方こそ、黒々と塗って、たいした不体裁もありませんが、こっちの方は見る蔭もなく荒れて、支えの柱は所々^{ゆが}歪んだまま、^{さらさ}曝れきった板は、灰色に^{ふしよく}腐蝕して、所々に節穴さえ開いております。

平次とガラッ八が塀際を離れて元の格子戸の前へ来ると、青い顔をした娘が少し取り乱した姿で目礼をしておりました。

「お町さんでしょうね、飛んだお邪魔をしました」

「どういたしまして」

「気分はどうです」

平次は格子の中へ入って、言葉はひどく丁寧ですが、いつもに似ぬ凶々しい態度で^{かまち}上がり框に腰を下ろしました。

「有難う御座います、大したことは御座いません」

何という痛々しい感じのする娘でしょう。白粉っ気のない初々しさも充分に美しいのですが、可哀想に眉から左の耳へかけて火の燃えるような、^{あかあざ}赤痣です。

「そんな事で変な気を起しちゃならねえ」

平次はつかぬ事を言って、この娘の^{みにく}宿命的な醜い半面を見詰めました。右半面がお才などは足許にも寄りつけぬほど美しいのに、これは又、何という造化の悪戯でしょう。血と肉で出来た^{だいけっさく}大傑作へ何か気に染まぬ事があって、赤い絵の具皿を叩きつけたと言った顔です。

「ところで、女世帯では何かと物騒だろう。隣の畳屋を見張らせながら、ごく要心の良い男を一人置いて行くが、泊めて下さるでしょうね」

「えッ」

くるい咲き

「八、^{てめえ}手前今晚から、当分ここに泊っているんだよ、用心棒に」

「親分、あっしが？」

「そうよ、若い女の中へ転がして置くには、手前のような用心の好い男は滅多^{めった}にねえ」

「チェッ、情けねえことになりやがったな」

「頼んだよ、八」

平次はろくに返事も聴かず、そのまま神田へ引揚げました。

「弱ったなア、どうも、驚いたなア」

後に残された八五郎の弱りようと言うものではありません。

若い女二人の白い眼に射^{いすく}竦められて、何時までもじもじしていることでしょう。

四

「親分、大変な事になったぜ」

「又大変かい、八の大変に驚いていた日にゃ、御用聞が勤まらねえ」

平次は縁側で相変らず朝顔の世話に余念もありません。

「立派な御用聞が朝顔^{あさがおどうらく}道楽を始めるようじゃ——」

「何だと、八」

「へッ、へッ、天下は泰平だって話で」

「馬鹿にしちゃいけねえ、——ところでその大変というのは何だ」

「また一人死にましたぜ」

「何？ 到頭お町が死んだのか」

平次は朝顔を投げ出すように立ち上がりました。

「お町——とどうして解るんで」

ガラッ八の鼻はキナ臭く蠢めきます。

「俺はそれが危いと思ったからお前を泊めたんだ、何だって夜っぴて見張っていねえ」

「それは無理だよ親分、そう言ってくれさえすりゃア、あの娘の首っ玉^{かじ}へでも噛りついていたのに、あっしは外から来る野郎ばかり見張っていたんだ」

ガラッ八は叱られながら甚だ不服そうです。

「とにかく行って見よう、もうこれっきりだろうと思うが、一応見て置かないと、後々のことが安心ならねえ」

二人は直ぐさま飛出しました。

麴町四丁目の、お町の家へ行って見ると、隣の畳屋の井戸から引揚げて来たばかりのお町の死体は、乾いた物に着換えさせて、二人の下女と、それから、日本橋から駆けつけたという、お町の姉かねというのが、線香を焚いたり、鉦を叩いたり、泣き濡れて拝んでばかりおりました。

「畳屋の井戸へ飛込んだのかい、成程こっちの方が少し深い」

平次は今更そんな事まで感心しております。

「銭形の、御苦労だね」

畳屋からノソリと出て来たのは朱房しゅぶさの源吉、朝っからアルコールが胃囊いぶくろへ入ったらしく、赤い顔と据った眼が、何となく挑戦的です。

「朱房の兄哥、八五郎の奴が飛んだお節介をして済まなかったねえ、勘弁してくんな」

平次は微笑をさえ浮かべて、蟠わたかまりのない調子でこう言いました。

「なアに、自害が自害と解りさえすりゃアそれでいいのさ。人殺しの下手人が解らなかつたとなると、この辺を縄張かかにしている、この源吉の顔に拘かかわると言うものだ、——なア八兄哥、今度はお町は井戸へ投げ込まれたに違えねえなんて言わないことだぜ」

「そんな事を言やしません」

八五郎は盆くぼの窪のあたりを搔かいております。

「丈吉とお町は言い交した仲さ、——丈吉が借金だらけで自害したんで、お町がその後を追うつもりで、わざわざこの井戸までやって来て身を投げた——とね、本阿弥ほんあみが夫婦づれで来て、この鑑定かんていに間違いはあるめえ」

朱房の源吉は本当にしたり顔でした。

お町の家へ引返して来ると、姉のお勢はすっかり心を取り直したもののか、薄化粧までして平次とガラッ八を迎えました。

二十七八——どうかしたらもう少し若いでしょうが、とにかく、素晴らしい肉体を

持った女で、その妖艶ようえんな美しさは興奮した後だけに、却って眼の覚めるようです。若い雌鹿めじかのように均勢てあしの取れた四肢、骨細のくせに、よく脂あぶらの乗った皮膚つやの光沢などは、桃色真珠しんじゆを見るようで、側へ寄っただけで、一種異様な香気を発散して、誰でも酔わせずには措かないと言った、不思議な種類の女だったのです。

「お、人形町の師匠じゃないか」

「あら、銭形の親分」

取繕とりつくろったところを見ると、紛れもありません。それは人形町で踊りの師匠をしている、有名過ぎるほど有名な女だったのです。

「お町さんの姉というのは、師匠だったのかい」

「え、あの娘も本当に可哀想な事をしました。思い詰めた事があつたら、それと私に相談してくれればいいものを」

お勢は新しく湧いて来る涙をどうすることも出来ずに、身を捻ひねって、袖口を顔に押当てました。痛ましくも顫ふるえる肩のあたり、何と言う艶めかしくも美しい悲しみの姿勢ポーズでしょう。

「気の毒だったネ、そんな事もありはしないかと思って、八五郎を側へつけて置いたんだが——」

「そうですね、本当に親分さんの思いやりは、どんなに有難いと思ったか——でも、死ぬ気になった者は、どんな隙すきでも見つけます。八さんのせいにしちゃお気の毒じゃ御座いませんか」

「まアまア、あんまり泣くのも妹さんのために良いことじゃあるまい、諦あきらめろと言つては薄情だが」

「有難う御座います、親分さん」

平次はいい加減にして神田へ引揚げました。事件はこれで何もかも大団円になったようですが、平次の心の中にはまだまだ済まない事ばかりです。

「八、気の毒だが、これから三日に一度位ずつ四丁目へ行って見てくれ」

「四丁目？」

「麴町四丁目だよ。晝屋と大里とかいう浪人の家と、それからお町の家へ当分姉のお勢が住む事になったそうだから、序ついでにそれも見廻るんだ」

「まだあの辺に何かあるんですかい、親分」

「これから本当の芝居が始まるだろうよ、見ているがいい」

平次は、何やら呑込み顔にうなずきます。

五

それから十五六日、平次は外の大きな事件に首を突っ込んで、早出の遅^{おそ}帰りを続けたために、ガラッ八に逢う機会もありませんでした。

「親分、驚いたぜ、全く」

ガラッ八は到頭平次を捕まえました。

平手で長い顎から頬を撫でて、恐ろしく擦った顔をして見せるのです。

「何に驚いたんだ、——また四丁目で誰か死んだのかい」

「そこまでは行かねえ、が、あのお勢がどうかしたんだ」

「——」

「妹の家へ入り込んだは宜いが、近頃は恐ろしく若造りで妹の三十五日も済まない内から、町内の若い者を集めて、浮れきっているんだ」

「フーム」

「日髪日化粧で、どう見たって二十二三だ。大変な化物だぜ、あの女は」

「それがどうしたんだ、お前が口説^{くど}かれでもしたと言うのか」

「へッ、口説きもどうもしねえが、あんまり色っぽいんで、気味が悪くて、長居は出来ねえ」

「大層気が弱いじゃないか」

「騙^{だま}されると思って、親分も一度行って見なさるが宜い、請合^{うけあい}二三日はボーッとするから」

「それは面白かろう、見ぬは末代^{まつだい}の恥だ、直ぐ行くとしようか」

「お静さんが気を悪くしなきゃア宜いが」

「何をつまらねえ」

二人はもう日が暮れたというのに、麴町四丁目までやって行きました。

「お勢さん、親分を伴れて来たぜ」

案内役のガラッ八は、顎^{あご}から手を外して、格子を開けます。

「あら親分、その後はすっかり御見限りねえ、でもまあよく」

といった調子、荒い浴衣の袖を翻^{かえ}して、ニッコリすると、その辺^{へん}じゅう桃色^{こび}の媚が撒き散らされて、何もかも匂いそうです。

「これは驚いた」

「あら、何を驚いてらっしゃるの親分、丁度淋しがっているところよ、ゆっくりなすっても宜いでしょう」

手を取っていきなり奥へ。

人形町にいる時は、色白の素顔を自慢したお勢、どう踏んでも三十がらみに見えた大年増でしたが、厚化粧^{ささべに}に笹紅^{ごくさいしき}の極彩色をして、精一杯^{きた}の媚と、踊りで鍛えた若々しい身のこなしを見ると、二十二三より上ではありません。

どっちが本当のお勢なのか、こうなると平次も見当がつかなくなる位。

「驚いたね、どうも、お勢さんがそんなに若いとは思わなかったよ」

照れ隠しに煙草ばかり^{くゆ}燻らしております。

それから酒。

十重二十重に投げかける妖しの網を切り破るように、平次が神田へ帰って来たのは、もう夜中過ぎでした。

それからは平次の意気込みも違い、ガラッ八の報告も急に活気づきました。

晝屋の勝蔵がせっせとお隣りへ通い始めた、と言う報告があってから十日ばかり経つと、今度は晝屋の息子の駒次郎が急にお勢に熱くなり出して、町内^{おおかみれん}の狼連も、好い男の勝蔵も、少し顔負けがしていると言って来ました。

お勢の妖しい魅力^{みりよく}は、間もなく麴町中の若い者を気違いにするのではあるまいかと思うようでした。

猛烈な達引と^{さやあて}鞆当^{もた}の中に、駒次郎が次第に頭を上げ、町内の若い衆も、勝蔵も排斥して、お勢の愛を一人占めにして行く様子でした。

油のように行渡る年増の愛情は、駒次郎をすっかり夢中にさして、もう大里玄十郎の娘お才などの事を考えている余裕もなくなってしまった様子です。

「何かきっと起りますぜ」

ガラッ八がそう言って、額を叩いたり、手を揉んだりしたのは、お町が死んで四十日目あたりのことです。

六

「いよいよ大変だ、親分」

ガラッ八が飛込んで来たのは、もう日射しの秋らしくなって、縁側の朝顔も朝々の美しい装よそおいが衰えかけた時分の事でした。

「又大変か、今度は誰の番だ」

「畳屋の駒次郎やが殺られましたぜ」

「今度は自害じゃあるまい」

「畳庖丁で、首を右から後ろへ半分も切るなんてことは、朱房の親分が見たって自害にはならねえ」

「よしッ、行って見よう」

平次は直ぐ飛んで行きました。

畳屋の裏木戸を入れて、群むらがる弥次馬を掻き分けるように井戸端へ近づくと、井戸と物置の間の朝顔の垣根の中に、畳屋の息子の駒次郎あけが、紅に染んで倒れているのでした。

「銭形の兄哥、御苦労だね」

「おや朱房の兄哥」

「下手人げしゅにんは拳ったよ」

「へエ——」

「職人の勝蔵さ、隣りへ引越して来た踊りの師匠を張り合あるじって、主人の息子ぼらを殺したんだ」

源吉は大分好い心持そうです。

「本人は口を割ったろうか」

「知らぬ存ぜぬだ、いずれは少し痛めなきゃアなるまい」

「証拠は？」

「何んにもねえ——と言いたいところだが、あり過ぎて困っているんだ。刃物は勝蔵の使っている畳庖丁だ、——もっとも本人は井戸端へ忘れて置いたっていうが、良い職人が道具を井戸端へ忘れる筈はねえ、それに、昨夜駒次郎が外へ出たがるのを、ひ

どく気にしていたそうだ」

源吉のいう証拠はあまりに通り一遍のものです。

「駒次郎を怨む者は、まだ外にもある筈だ。怨みだけで言えば、町内の若い者が半分ほどは下手人の疑いがある。それから、大きい声じゃいえないが、娘を捨てられて怒っている浪人者もいるぜ」

「大里玄十郎か」

「まアね」

「そんな事を言ったって、勝蔵が下手人でないとは決らないぜ、俺はともかく八丁堀へ行って来る。町内の若い者なり、浪人なりを縛るしばがよかろうよ」

朱房の源吉は、いや味を言いながら行ってしまいました。

町内の若い者、半分は下手人の疑い——と聞いて怯おびえたのか、路地を埋めた弥次馬は、一人去り二人帰り、間もなく大分消えてしまいます。

「親分、本当に勝蔵じゃありませんか」

ガラッ八は少し心配そうです。

「解らないよ、だがね、八、駒次郎の傷は、喉笛のどぶえの右側から始まって、たいして深くはないが、首を半分切り落すほど後ろへ長々と引いているぜ、正面から向った相手がこんな芸当が出来るかしら」

「斬って下さいと首を突出したようだ——って親分は言うんでしょう」

「その通りだよ」

「背後うしろから切ったとしたら」

「抱きついて念入りに刃物を引かなきゃア、こうは斬れない」

平次の言うことは大分変わっておりました。

「じゃ親分、どういうことになるんで」

「まだ何にも解っちゃいないが、昼庖丁のような短い物で、これだけ念入りに斬ると、下手人はうんと血を浴びたことだろうな」

「——」

「勝蔵の持物を皆んな見せて貰ってくれ、血のついたものが一つでもあれば下手人だ」

「へエ——」

ガラッ八は飛んで行きましたが、間もなくつままれたような顔をして帰って来ました。

「血なんかついた物は一つもありません」

ゆかした
「床下や天井裏や押入れには」

「待って下さい」

ガラッ八はもう一度飛んで行きましたが、どこにも怪しい物は見つかりません。

「なきゃア宜い。住込みの職人が、着物を一と揃そろいなくして、人に気づかれない筈はない。やはり勝蔵じゃなかったんだろう、——念の為に水を一と釣瓶つるべく汲んでみる——井戸へ沈めた様子もないだろう」

「——」

「ところで八、俺は近頃朝顔を咲かせて楽しんでいるが、自分で育てると、草花も、我が子のように可愛いものだ」

「——」

平次が人殺しの現場で、いきなり朝顔の話が始めたので、ガラッ八も呆あっけ気を取られております。

「草花を可愛がる心持は、又格別だよ。自分で育てないのでも、折れたり、散らされたりすると、我慢が出来ない」

「——」

「駒次郎を殺した下手人は、朝顔の垣のを除けて大廻りして逃げている。こんな優しい人殺しは珍らしかろう」

「——」

「荒っぽい男や、浪人者の仕業じゃねえ」

「——」

「八、俺はもう下手人探しが厭になったよ。こんな時は熱いお茶でも飲んで、休むんだね」

平次はそんな事を言いながら、塀へいどなり隣のお勢の家へ引き揚げました。

七

「まア、親分」

「お勢、これはどうした」

家の中はガランとして、下女の姿も見えない上、昨日までは、あんなに厚化粧の若作りだったお勢が、白粉も紅も洗い落して、元の素顔に、無造作な櫛巻くしまき、男物のような地味な単衣を着ているのでした。

「引っ越しですよ、私はやはり人形町の方が水に合いそうで——」

「それも宜かろう、——ところで、俺もつくづく岡っ引が厭になったよ」

「まア」

「気の毒だがお茶でも貰おうか」

平次は庭から縁側へ廻って、青桐あおぎりの葉影の落ちるあたりへ腰を下ろすと、お勢はいそいそと立って渋茶を一杯、それに豆落雁まめらくがんを少しばかり添えて出しました。

「お勢、今日一日俺は岡っ引じゃねえ、お前の昔馴染むかしなじみ——まア、兄貴か友達と思って話してくれ」

「——」

平次の言葉は急にしんみりしました。

「俺は、口幅ったいようだが、この間からの不思議な事の経緯いきさつを、何もかも知っているつもりだ。最初から話してみよう、——もし違ったところがあるならそう言ってくれ」

「——」

お勢は首をうなだれました。白粉っ気がないとやはり元の三十前後の大年増ですが、その物淋しい美しさは、極彩色ごくさいしきのお勢よりは却って清らかで魅力的であります。

「駒次郎は、お前の妹のお町と言い交していた。かなり深い仲だったに相違ない、毎晩合図をしては、あの塀へいを挟んで両方から話したり、笑ったり、泣いたりしていたんだ——それが、大里玄十郎父娘が引越して来ると、駒次郎の心は急にお才の方かたむへ傾いてしまった。父親の弥助も、武家の娘を昼屋の嫁にするつもりですっかり夢中になって、あの大里玄十郎おおほらふきが大法螺吹の山師だとは気がつかなかったんだ」

「——」

「お町は毎晩合図をしたが、駒次郎はもう塀の側へ来てはくれなかった。で、到頭我慢がし切れなくなって、切れてやるから、たった一度だけ逢ってくれ——と言って

くるい咲き

やった」

「――」

「その手紙を見付けたのは丈吉だ。お町に気があったから、駒次郎のふりをして塀の向う側へやって来て、駒次郎がするように、塀の穴へ眼を当てて見た。お町はその時駒次郎を殺して、自分も死ぬ気だったんだ、いつぞや駒次郎が自分の家へ忘れて行ったたたまばり畳針を持ち出して塀のこっちから、一思いに眼を突いた」

「――」

「丈吉は声を立てたかも知れないが、何分のふか深傷で、井戸端へ行くのが精々だった。つるべ釣瓶の水で眼を冷そうとしたが、急に力が抜けて井戸端に突っ伏して死んでしまった。眼を洗わなかった証拠には丈吉の右の眼には少しばかり墨がついていた、たったそれだけの事で俺は何もかも見破ったような気がした」

「――」

何という明智でしょう。平次の言葉は、見て来たようにはっきりしております。「俺は大方察したが、お町が殺したという証拠は一つもない、それに、男に捨てられたお町の心持がいじらしかった――万一自害するような事があってはならぬと思い、それとなくいまし戒めた上、八五郎をつけて置いたが、やはりその晩身投げをしてしまった。可哀想だが、俺には救いようがなかったのだよ」

「――」

「それから、お前が出て来た。妹の敵を討つつもりで、本心にもない厚化粧にうきみ浮身をやつし、町内の若い者を集めて、駒次郎の気を引いた、――浮気な駒次郎はお才を振り捨ててお前のところへ来たが、女郎蜘蛛の網に掛った虫のように、どうすることも出来なくなったのだ」

「――」

「物置の前で逢引をした晩、井戸端に勝蔵が忘れて行った庖丁を見ると、お前は急に駒次郎を殺す気になった。抱きついて来るのを、自由にされるような振りをして、背後から庖丁の手を廻して、喉から後ろへ存分に斬った」

「――」

「朝顔の垣を踏み倒すのが可哀想になって、お前は廻り道してここへ逃げ帰り、血だらけになった着物を始末し、白粉も紅も洗おい落して、元のお勢になった」

くるい咲き

「――」

「どうだ、違ったところがあるか」

平次の話は微びに入り細うがを穿ちました。

語りおわって顔を挙げると、お勢は三鉢四鉢大輪の朝顔を並べた縁に突っ伏して、正体もなく泣いているのでした。

「親分、一々その通り、寸分の違いありません。さア、私を縛って下さい」

「いや、縛るとはまだ言わない筈だ」

「けれど、これだけは御存じなかったでしょう。お町は私の娘――天にも地にも、たった一人の生みの娘だったんです」

「え、お前の娘、――一年が近過ぎるようだが」

「近いもんですか、お町は十八、私は三十四」

「三十四？」

「日本橋のおおだな大店の若旦那との間に、――私が十六の時生んだ娘でした。お店に置くのが面倒で、月々仕送って頂いてここに置きました。私の側へ置くと、筋の悪いおおかみたち狼達が集まって来て、ろくな事を教えないだろうと思ったのが却って間違もといの基だったのです」

「それは――」

「娘のお町が死んだ時、私も死んでしまいたいと思いましたが、身仕舞して鏡を見ると、まだまだ私には若さも綺麗さも残っていそうに思ったので、一と芝居打って見る気になりました。武家育ちのはりこ張子細工のような娘に負けようとは思いません」

「――」

「私は勝ちました。どたんぼ土壇場ですっぽかして、駒次郎に首でも縊くくらせようと思ったのが、あんまり執拗しつこく絡からみつかれて、ツイ庖丁を振り上げてしまいました。私は娘を騙した男に、どんな事があっても身は任されません」



お勢はもう泣いてはいませんでした。真っ直ぐに目を起すと、観念し切った殉教者じゆんきやうしやのような清らかさが、その蒼白い顔を神々しくさえ見せるのでした。

「お勢、俺は今日一日岡っ引じゃないと言った筈だ。——駒次郎は鎌鼬かまたちにやられて死んだんだよ。放って置けば証拠がないから、誰も気がつく筈はない、勝蔵は笹野の旦那にお願いして、縄を解いて貰う手もある」

「親分」

「解ったかお勢。——人を殺したのは悪いが、俺には縛る力はない、——せめて死んだ人達の後生とむらを吊ってやれ。解ったか」

「ハイ」

お勢も、側で聞く八五郎も、すっかり泣き濡れて、暫らくは顔も挙げませんでした。

× ×

お勢はその後踊りの師匠よを廃して、お町ほうむを葬った寺の花屋の株を買い取りました。美しく清らかな花屋のおかみが暫くの間江戸の評判だった事は言うまでもありません。

(編注)

作品中には、身体の障害や人権にかかわる、差別的な語句や表現が見られますが、本書が成立した当時の時代背景等が現代とは異なる古典的な文学作品でもあり、著者が故人でもありますので、底本のままとしました。ご理解、ご諒承のほどをお願い申し上げます。

挿絵一萩 柚月©2017

初出―「オール讀物」昭和九年七月号 文藝春秋社

底本―「錢形平次捕物全集」第二巻 河出書房 昭和三十一年五月三十一日初版

編集・発行 錢形倶楽部 <http://www.zenigata.club/>

錢形倶楽部では本編の縦書き PDF ファイルもダウンロードできます。